



Giovanni B. Langetti

ヨブの美貌の3人の娘の名前は記されているのに妻の名前がないというのは変ではありませんか。妻はヨブの試練の時も、艱難の時もいつも彼の傍らにいたというのに。彼女は夫が肉体的な痛みと悲嘆に非常に苦しんでいるのを見て、「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」(ヨブ 2:9)と言った、この2行の言葉を発した時にだけ登場しています。

ヨブ夫婦を襲った悲劇はシェバ人やカルディア人による畑の襲撃や家畜の略奪、火事、大風による家屋の倒壊による10人の子供たちの死でした。耐えがたい悲しみでしたが、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」(ヨブ 1:21)と信仰をもって忍耐しています。二度目の悲劇はひどい皮膚病がヨブの頭のとっぺんから足の裏まで生じ、体中をかきむしる有様でした。ヨブの苦しむ姿を見て、妻の言った言葉はサタンの狙い通りの「信仰を捨てよ」でした。この妻の不信仰な激しい言葉に「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか。」(ヨブ 2:10)と夫婦に与えられた幸不幸を共にしようと答えています。

彼女の言葉はサタンの企みが記された直後に置かれているので、あたかも彼女がサタンの使いかのようなようです。そのため、アウグスティヌスは彼女を「悪魔の共犯者」と言い、カルバンは「サタンの道具」、「悪魔的怨霊」と書いたといわれています。

ヨブの妻は夫の苦しむ姿を見て、慰め、力づけ、看病し、医者や、効く薬を探し求めたり、祭司や預言者に祈ってもらったりはしなかったのでしょうか。そのようにしたという記述はありませんので不明ですが、一般的にほぼすべての妻はそのように動きます。ヨブにとって妻はどういう存在だったかを推測させる記述は、ヨブの妻への誠実さを訴えている部分です。わたしが隣人の妻に心奪われたり/門で待ち伏せしたりしたことは、決してない。もしあるというなら/わたしの妻が他人のために粉をひき/よその男に犯されてもよい。それは恥ずべき行為であり/裁かれるべき罪なのだから(ヨブ 31:9) ヨブは他の女性に心ひかれたことは一度もないと言っているのです。ヨブと妻は一心同体であったといえるのです。妻としては幸せで、十分満足いくものでしょう。この妻は、ヨブの息を嫌った(ヨブ19:17)と記されてはいますが、見殺しにするとか、死ねということはありませんではないでしょうか。

けれども「神を呪って、死ぬほうがまし」という言葉を妻の口にさせています。この思いは、一心同体であるヨブの隠された部分、それこそ、ヨブが戦わなければならない、自分の不信仰のつづきであるといえましょう。なぜなら、ヨブは自分の生まれた日を呪っているのです。そして、死にたいと願っているのです。やがてヨブは口を開き、自分の生まれた日を呪って、/言った。/わたしの生まれた日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も、/その日は闇となれ...なぜ、わたしは母の胎にいるうちに/死んでしまわなかったのか。せめて、生まれてすぐに息絶えなかったのか。(ヨブ3:1)



神、ヨブに答える William Blake

正しく生きている人間が神には罪があるとして裁かれる苦しみは理不尽です。けれども、一心同体のヨブと妻が、心の中でサタンの企みである疑いと戦っているのも現実です。その相克する思いの中で、信仰にかけて選び取る、決断的に生きる道が神によしとされるのでしょうか。旧約聖書はアダムとエバの時から、女性に人間の悪の部分を負わせて、男性中心に物語を展開してきました。ヨブの妻もヨブの思いを代弁させられているのです。神がヨブと妻二人に向かって祝福の右手を差し伸べているブレイクの絵を見ると、本当に心が和みます。